
Harper Lee の “To Kill a Mockingbird”

と純文学性についての考察

村 山 和 子

目 次

1. Harper Lee と To Kill a Mockingbird の紹介
2. Best sellers の魅力
3. 通俗小説と純文学の境界（序説）
 - 梅田実氏による純文学の条件
 - ロマンスの意味
 - 芸術性とは？ (sublimation of emotion)
 - Manninger の説明
 - Collective unconscious……夢みる力
 - 池田亀鑑氏の「あそび」
 - rotic な要素 (Manninger に依る)
 - 情緒
 - 真理の追求, 自己の浄化
 - 調和と均衡
 - imagination と fiction
4. 文学の本質の条件
5. 技術の問題
6. To kill a Mockingbird と純文学の条件との照合
7. 参考文献

Harper Lee は Alabama の Monroeville で 1926年に生れた。Alabama 大学で法律を専攻したが卒業後、国際航空会社で働いた後、執筆に転じた。Harper Lee のようにその最初の小説が突然にベスト・セラーになり、同時にピューリッツァ・プライズを得るなどという事は珍しい事で、他に同じようなベスト・セラーでは Margaret Mitchell の “Gone with the Wind” があるのみである。

「ベスト・セラーの魅力は

1. 宗教, 2. 人生問題, 3. 未知の世界への冒険という順序で、如何に人間の生活が変化しても変化しない *humanity* を捉えていなくてはならない、今後は社会意識や歴史意識の方が現代人には興味がある」と武田勝彦氏は『アメリカのベスト・セラー』の中でべている。

ベスト・セラーというと、それだけで何となく文学としては低いレベルを感じさせる傾向がある。それは大衆にアピールするという事から来ているのであろうか。しかし同時に読者から共感を得るという事は純文学の一つの大切な条件となっているのである(後述)。この Lee の作品には何かがある。それは、人生問題と人道主義(ほとんど宗教に近い)を扱っているせいであろうか。又未知の隣人へのあこがれは、ベスト・セラーの魅力の第三に通じるものがあるようである。つまり、彼女の扱った theme とその approach のよさにあると思われる。

この小説は非常に面白く、しかも作者の倫理観がある。彼女についてもっと調べたいと思って手を廻したが、2, 3の essay があるのみである。同時に、アメリカでは文学作品と云うより寧ろ通俗作品に属するとされて居る事を知った。そこで通俗文学と純文学の境界という問題が興味をひいたので、その点について論じる事にする。

純文学と通俗文学について海田実氏によると次の5つの考え方が有る。即ち、

1. 作家が自分の感情や人生観のやむにやまれないような表現欲に駆られて厳粛な芸術的立場から創作したものを純文学と云い、そうした欲望や、立場にあまりこだわらずに一般民衆に面白い、至って分かり易い読物として提供するために書

いたものを通俗文芸という。

2. いわゆる高級上品な雑誌や新聞に発表された作品、或は主として有名作家の作品の刊行で立っている出版社から発行された単行本の作品などが純文芸のように云いなされ、低級な一般民衆むきの興味本位的な読物を提供する雑誌、新聞に発表された作品、或いはそうした出版社から発行されたいわゆる赤本式の単行本の作品の如きは通俗文芸のように扱われる。
3. 文筆を業として専門としている人たちが発表したものを純文芸といい、そうでない一般の人々が趣味道楽として書いたものを通俗文芸という場合もある。
4. 昔、貴人の作品はどんなものでも、純粋な優れたものであり、でない一般民間のものは取るに足らぬ卑俗なものとした。
5. 芸術至上主義の唱えられた時代には、その立場と傾向のものは純文芸であり、芸術の功利主義、即ち人生のための芸術といったものは通俗文芸と云われる。

この二つの間にどこまでが純文芸で、これ以外が通俗ものだという劃然たる区別は立たない。

(1)によれば “To kill a Mockingbird” は純文芸と称されてよいようである。彼女の長年に亘って蓄積された人生の倫理観がやむにやまぬ思いで随所にほとばしっている。唯、純粋な芸術の見地からというところに疑問が残る。問題は再び純粋な芸術というところに戻って来る。(2)については「云いなされた」という言葉を使っているのは梅田氏も、この説に全幅的には賛成していないのであろうが、純文学が必ずしも高級上品な雑誌や新聞に発表されるものだけとは限らないであらう。尤も作家が昔のように権力者の保護を受けた作家でなく、自由である場合、その評価は読者が行うか、又は出版社が売れそうなものを出版するわけで、純粋な評価が即刻出来るものではない。しかし、一般大衆向きのものにはその読者を考えて作家も通俗的なものを投稿する事から(2)のような見方も可能であらう。(3)に関しては、一般人の中からよい作品が現われる事もあり、このように断定する事は出来ないと思われる。(4)は論外であり、(5)は時代と共に変化するような感じが残る。こういう点から梅田氏の分類法によれば「芸術の見地」という言葉の深い意味を除いて他では Lee の作品は純文芸の範疇に入れて差しつかえないようである。尚梅田氏によれば、文芸の使命として、

1. 小説は人を慰め楽しませる。
2. 小説は人生を正確に描いて、その真の姿を見せる。

3. 小説はその作者の人生観を伝える。

の三箇条をも満足させている。

大体小説の事をロマン（ス）と云う事もあるが語源的にはロマン（ス）の意味は、

1. Romance 語で書かれた中世騎士の武勇談
2. 冒険武勇行為
3. Imagination
4. Fictious
5. Love affair

となっているが、もっと掘り下げてみると、現在達し得ない事物に対する longing というものが真の意味であろうか。「真理の追求」も一種の longing ではなからうか。W. Pater が unfulfilled ideal という言葉を使っているが「真理の追求」又は longing と深い関係があるのではなからうか。先程の梅田氏の条件に返って、芸術的な、とか芸術性とは一体何であろうか、筆者は、一言にして言えば sublimation of emotion ではなからうかと思う。アメリカの（精神分析派）心理学者 Karl A. Maninnger に依れば sublimation とは高度に変形された攻撃的な衝動の運命をかたどる、と解釈している。人間の心にはエスと称される本能のような無意識の層がある。ユング(Carl G. Jung)によればこの本能の中に本人自身のものだけでなくその民族に共通している collective unconscious(集合無意識)なるものが存在しているという。元来無意識は観念と観念を凝縮、錯綜させる作用が強いので、これが微妙な結びつきで人間共通の感情をより価値ある質の物に変えた場合に sublimation がより完全に行われるのであろう「夢」と云えば実際の夢そのものと「あこがれ」のいみとを含んでいる。実際の夢の中でつかわれる言葉は祖先の言葉であって、その夢の中には意識していない第二の自分が現われて、心が浄化される、と土居氏は考えている。我々が特に解けなかった問題が夢の中で教えられたり、夢の中の景色の美しさが後々まで心の中に残っていたりするの unconscious を通じて高揚されるのであろう。「夢みる力は神を見る vision で浄化する夢をみる事は higher dream でこれによって myth や詩の創作は源を発する」と土居氏は述べている。浦島太郎の話と、Rip van Winkle とが同じテーマを持っているのは我々(Mongolian)と共通の無意識をアメリカ人(Caucasian)も持っている事の証左であろう。この

collective unconscious がロマン的な神話の源となるのであろう、伊弉諾^{いざなぎの}伊弉冉^{いざなみの}尊の国づくり、柱まわりなどの神話は、sex の昇華^(本能)であると考えられている。

池田亀鑑氏は「文学は遊びである」と云われていた。「遊び」とは何であろうか、心を楽しませる事とか、生活の手段ではないとか、色々の解釈が出るであろう。しかし現在大体の作家はそれを生活の手段としている。(しかし、19世紀の東西の有名な作家はしばしば本業を他に持っていた) カール・メニンジャーは愛憎 (Love and Hate) に「芸術や sport などでは erotic の要素があまり支配的であるため、そこに攻撃的要素を認識することは通例甚だ困難である。この理由の故に、私は芸術は『遊び』の最高の形式を構成するものに違いないと仮定したのである」と述べている。又 Thorstein Veblin に依れば遊びを二種に分けている。(これはあまりに合理的だとの批判があるが) 即ち

1. 無益なもの……inhibit する罪悪感が伴う。
2. 手腕を発揮したいと思う本能が偽装のもとに満足されているもの……建設的なもの

Manninger の説を要約すれば、遊びとは攻撃的要素の緩和であると云えよう。池田氏の云われる「遊び」とはあくせくする身すぎ世すぎのなりわいから解放された悠々たる世界を意味しているばかりでなく、とげとげしい現世的なものから離れ、昇華された抽象、幽玄、情緒の世界を云ったものかと思われる。(因に池田氏は万葉よりも古今新古今の方を象徴の世界と称し、高く評価されていた) ここで筆者は純文学とは遊び(攻撃的衝動の昇華である)との一つの仮説を立てたのである。

次に情緒であるが、純文学か否かではローレンスの作品が問題となって裁判沙汰になったが、それは sex を扱ったからであったが、生のままでは本能であるが故に文学にはタブーとされているのは当然であるが、攻撃的な本能がエロティックな要素を帯びると芸術(遊び)となるとメニンジャーが説明しているように本来性的なものには美の魅力が具っているようである。⁽¹⁾「美の性質はある種の二次的性特徴に関連しているようである。美術で云えばヌードに当るように、生の^{なま}欲求がある客観的なルートによって微妙な昇華を調和と、成長という形においてなしとげている時に芸術性がひらめき出るのはなかろうか。扱い方、醇化の仕方によって sex は美の源である

(1) 宮城音弥 精神分析入門

ようである。結局ロレンスの作品が純文学に入れられたのは彼の真剣な人間探求（たとえ問題が「性」であっても）の態度と、そこに作られた調和（sex の昇華）のためであろう。これ等の事を念頭において文学の definition にもう一つの approach がある。

「文学は本来仮構の世界に絶対的真実を追求する」（広津和郎氏による）という考え方である。つまり fiction でありつつ作者はその中に真理を追求して苦しみつつ自分自身より高い再形成を行って行くものであろう。これに反して通俗文学は読者の興味に合わせて妥協して行く過程であろう。桑原武夫氏によれば「純文学は人生に於て一つの新しい経験を形成しているのに対し通俗文学は新しい経験を形成していない」とある。純文学において作者は自分一人たどる孤独な道すじを通過しつつ何時の間にか読者をも共感させる。それが出来るのは作者が自分の感情を昇華しているからであり、昇華出来るが故に多くの人々をゆがめる事なくその作品の中に、より新しい価値ある人生を生きさせるのであろう。しかしそこに到るまでに、作者自身が変化し、成長して行き、その過程を読者も共にたどるが故に読者はそれによって動かされるのであろう。

桑原武夫氏は優れた文学の要素を

1. 生産的
2. 変革的
3. 現実的

と規定し、通俗文学は

1. 価値については再生産的
2. 精神は温存的
3. 性格は観念的

としている。

* トルストイは「芸術とはどういうものか」の中で芸術品に不可欠の資格として

1. 新しさ
2. 誠実さ
3. 明快さ

と述べているが、新しさとは新しい人生を発見せしめるもの、（作者の中に新しさを発見するもの）であり、誠実さとは作者が対象に全人的 interest を持って働きかけ

* 伊藤整氏 小説の方法より

ることで、明快さとは作者の精神が他の精神に働きかけ、後者が前者の影響をはっきりとうける事で *communication* の問題と説明している。そもそも精神分析的に芸術性を考察すれば「心の中のしこりが無意識の中に形をかえて作品として表現されたもの」という考え方がある。芸術作品は芸術家の心の中のコンプレックスの昇華された表現である。もともと我々は作家と共通のコンプレックスを持ち、共通した感情の傾向がある。前述した *collective unconscious* の一部と考えられる。悲劇などを我々が好む時、我々はその文学と共に心の浄化を行って涙を流し、己が心の中のしこりを解消させるとアリストテレスは考えている。この浄化（カタルシス）はある時は告白という形をとって自己の追求となり、客観的に自己を解剖して真理を追求することによって読む人、みる人と共にその過程を分かち合い人を動かす事が出来るのであろう。

Wit や *humour* も心の中に溜っているものを間接的な方法で発散させるので発散の方法は昇華と云い換える事が出来る。

桑原氏は作者の *interest* を追求する態度が文学の純粋性を決定するように云って居るが、中村氏は近代の散文は「私」の自覚の象徴とみなして居る。近代と断っているから、この定義が普遍的絶対的であると我々が考えるべきではないが、伊藤整氏も「エゴの追求分析を文学の精神」と考えて居るところに中村氏と共通した点がある。近代は中世的な宗教観や封建性が姿を消して、人間尊重及び自我の自覚が発達して来たせい、書く人の興味は人間にむかい、しかも人間の一人である自己を真実に探求したのであろう。漱石の「三四郎」「それから」「門」の三部はこういう意味で近代的であり、「明暗」に於て一つの新しい精神的な *scenery* を我々に見せようとしている。吉川英治氏は通俗小説家として知られているが「新平家物語」では単なる英雄や戦争ではなく庶民の生活を愛情をもってまじめに取り上げている点、既に謂ゆる大衆小説を脱しているようである。

同じく伊藤氏に依れば、*ここに私の本音があり、これが私の倫理だと云うべきものが小説の中にあるべきだ」と述べているが、これがあまりに教育的な実用的な感じではなくて、事実の記録ではない、*fiction* の中に観察者の態度で、しかも人間の生きた生活を表現されなければならない、しかも読者を動かさねばならない。通俗文学で

* 伊藤整氏 小説の方法より

は、このような真剣な人間探求がなされないので、stereotype 化した人間が一つのプロットの中にそれぞれ役割をもって動いている感じである。真実に生きた人間の創作から程遠く思われる。デユマの「モンテ・クリスト伯」が前半は無実の罪によって一生を破壊されるようなはめに落とし入れられる苦しみや、しかも、何もなければ普通の人々であったかもしれない人達が偶然その時あった場所が好都合であったために、一人は愛を奪うために、一人は迫った危機を脱するために、一人はその栄達の望のために、一人の善意の主人公を利用して首尾よくしわよせして三人ともども悪人になり下るなり行きは fiction でありつつ、真実に人をひきつけるが、後半で主人公の作りもののような性格と、あり得ないような完全な勸善懲惡主義はもはや真に深い意味で読者を捉えず、大衆小説となってしまうている。

真剣な人間探求も、文学として、芸術性をもつのは実に調和と均衡があつてこそであり、又、読者を陶酔させるものである。Coleridge の“The Rime of the Ancient Mariner”が常ならぬものに対するあこがれでありつつ、その怪奇さが美によって一つの調和を、又、内面的には who prayeth best who loveth best という精神の高揚と調和により芸術性を高めている。

太田三郎訳“Theory of Literature”の中でウォーレンは sentiment (情操) と intellect (知性) の二極の間をイギリス民族の心のリズムが揺れ動く」と英文学の法則について述べているが、更につづけて十九世紀の美学者たちは一切の芸術は“sensuous shining forth of the idea”と主張している事を付け加えている。芸術としての文学は、多様性があり、複雑なものが融和しつつ成り立っているが、根本は fictitious なものと imagination の交り合ったものであり、その中に作者の思考を通じて成長のプロセスを経て真理が示され、しかも、そこに詩情が漂っているものであろう。池田氏の「象徴の世界」も、「知性と情操の間のゆれ動き」及び imagination と fiction を含ませている。

ウォーレンは更に、文学の要素として、「実用的でない」という事をあげているが、教訓的、教育的なものが生の形^{なま}で出ているものも、実用的な範疇に入るのであろう。以上の事を考慮に入れて、筆者は次の簡条を純文学の要素として考えてみた。

- (1) 真理の追求と人間の生き方に関する真理・把握
- (2) 虚構性と技巧性
- (3) 読者に強い共感を持たせること、面白さ (humour と pathos を含む)

(4) 昇華 (sublimation)

- a. 作者の倫理観
- b. 客観性
- c. あこがれ
- d. 遊び的要素
- e. 調和
- f. 成長
- g. 芸術性と情緒

以上のうち(4)の昇華の七つの面について述べると次の様になる。「客観性」(objective attitude)は作者の素材に対する感情を sublime してはじめてとれる態度であろう。「あこがれ」は作者の欲望の昇華されたものであるし、「芸術性」も作者のイド(又はエス)の sublimation と云い換える事が出来る。「調和、成長」も同様である。「遊び的要素」も攻撃的要素の昇華である。「作者の倫理観」も昇華の結果形成されるのである。この事はポール・ショッシャルも人間としての脳が一番大切な働きは、(個人個人の種々の価値観を社会的に又、その人個人にとっても価値あるものとするには(この事は即ち昇華であるが))脳、ことに脳の前頭葉の働きを必要とするものであって、このバランスのとれた統合こそ、動物でなくて「人間」の人間たる由以であると結論している。

更に広い意味に於ては「真理の追求」も内側にむかう意味の sublimation であろう。「虚構性」も生々しい事実を虚構によって sublime したものと云えるかもしれない。「読者に共感を持たせること」は生の感情や事実を客観的に昇華して、はじめて読者の sympathy を得るのであるから sublimation と全く無関係ではない。humour と pathos も前述のように昇華である。

こうして考察してみると、純文学とは我々の意識に近い事象の色々な approach と手法 (technique) を通じて、これにより深遠な、より荘厳な意味を与えること、即ち広義の sublimation とでも云い得るのではないか、如何に美しさ (poesy) を交えて、しかも誠実さにあふれて、我々の日頃のままの意識で入って行けるものを昇華しようとするかという事が、文学の大切なポイントではなからうか。

筆者が「昇華しようとする」という言葉を用いたのは、人間がこの相対的な世界に絶対を見出す事は所詮は困難な事であり、そこに常に苦しみと戦いがあるわけで、昇

華という問題も、その内容に於て、又形式に於て、これでよいという絶対的なものが人間には見出せないが故に文学には絶えず、つきず challenge があり、その過程が重んじられるのであろう。

以上芸術性、云いかえれば昇華について述べたが、これに加えて純文学の technique の問題として

1. 書きすぎない
2. あまりに論理的にならない

という事がある。書きすぎない、という事は読者の imagination に訴える事であらう。結局文学は論理とは抒情を重んじる点で異なる。

これ等の事を含み、Harper Lee の “To kill a Mockingbird” を今一度見直したいと思う。

虚構性について

主人公 Jem と Scout の隣人である誰も見た事のない Boo の人柄、子供達がその想像力にものを云わせて彼等の image の中の Boo の生活を劇に仕立てて、毎日毎日庭先で上演して楽しみ、夏休みの終りには立派な長い一代記になってしまったところ、又 Boo その人と子供たちの様々なほほえましい交渉、それを心ない人に邪魔された時の悲しみなどを通じてこの作品の筋の発展のために大切な影の prompter になっているところは、その虚構性のたくみさに感嘆すると共に、これが読者を捉えて離さない面白さの一つの重要な要素になっている事を思わせられる。黒人の裁判事件は事実起った事であるが、作者の Boo の character と筋を運ぶのにたくみに Boo と子供をからませているところ、この虚構性でどれ程この作品の主題のどぎつい性格を和らげているか知れない。

読者に強い共感を持たせる事、面白さ

子供たちの子供らしいあこがれ、悩み、喜び、失望、人種差別に苦しむ黒人の Tom の裁判、不思議な隣人にまつわる Poe 的ロマン、後にはその隣人に対するさり気ないいたわり、冷く型にはまった叔母に対する反感、真のデモクラシーへの目ざめ、など十分に読者の共感を呼び最後まで読者の心を離さない。

humour と pathos は淡々とほしているが随所に見られる。楽しく遊んでいるさなかに Jem がガレージの後に突然かくれて死んだ母親を思い出して涙ぐんだり、私生児の淋しい運命を負いながら、天衣無縫の imagination とおどけた性分で子供た

ちの遊びをいつもきわだって面白くする Dill が黒人の裁判をみた翌日、Jem と Scout に話すことには pathos がある ‘I think I’ll be a clown when I get grown,’ said Dill.

‘There ain’t one thing in this world I can do about folks except laugh, so I’m gonna join the circus and laugh my head off.’

‘You got it backward, Dill,’ said Jem. ‘Clowns are sad, It’s folks that laugh at them.’ (p. 220)

Uncle Jack は Jem と Scout の父の弟であり、かなりの年令ではあるが未だ独身の医者である。クリスマスの前夜、彼等の家を訪問したが、子供の心のよくわかる愉快な人なので子供たちは大喜びである。子供達と Jack の交わした最初の会話は傑作である。

Jem : “How’s Rose Aylmer?”

Scout : “She’s getting fat.”

Jack : “I should think so. She eats all the leftover fingers and ears from the hospital.”

Scout : “Aw, that’s a damn story.” (p. 86)

Rose Aylmer は Jack 叔父の愛猫で黄色い美しい牝猫で Jack の云うには ‘She is one of the few women I can stand permanently.’ だそうである。そもそも Rose Aylmer とは、英国のさる18世紀の詩人が世にも美しき人に思いのたけを詩につづったその女性の名前である。それをこの何となく愉快なさばさばした Jack 叔父がその愛猫に名付けるところが面白い。この叔父は兄の家に来るたびに町の郵便局にきこえるくらい大きな声で Jem の隣人の Maudie 小母さんに「これがあなたの結婚する最後のチャンスだ、もう二度とこんな人にはめぐり合わない」などと求婚するのであるが、いつもそれに負けない大声で断られる。どうせ Maudie さんはふざけた返事をするのだから先まわりをしてふざけてやるのだというのがこの叔父の弁である。その他到る所に humour と pathos, wit が見出される。

客観性

客観性も主要人物の Atticus の他人に対し又、裁判に対する態度が客観的で公平であると同様に作者の態度も客観的である。自分の主観や単なる人々の感情や圧迫に影響される事なく、自分の目で、しかも相手の長所を見ようとする父の態度は子供達の成

長のプロセスで大きな影響を与えて真の democracy への開眼となっている。

あこがれ

主人公の一人である Jem の正義に対するあこがれ、(無実の罪をきせられた黒人が絞首刑を云い渡された時 Jem は泣いた) 同じく Scout の公平に対するあこがれ、(叔母の不公平, formal な conventional な態度に対して子供ながらはっきりと自己の価値観を確立している) 又 Dill の純粋なものに対するあこがれ、隣に住んでいながら、まだ見た事のない人、又様々なこの世離れのした云いつたえのあるその人に対する猟奇的なあこがれは、次第に理解にみちた暖かい感情と変わって行く過程、あこがれの点については条件が充されている。

作者の倫理観

正義観とデモクラシー、人の立場に立って物事を考える事。即ち「愛」作者は恐らく書かずにいられない強い欲望にゆずられて、この小説に筆をそめたように思われる。作者の倫理観はその essay “Love in Other Words” に幾分論理的にはっきりと出されている。

Love is present in pity, compassion, romance, affection. Few of us achieve compassion.

With love all things are possible. Though I have all faith, so that I could remove mountains and have not charity, I am nothing. Love purifies. Suffering never purified anybody. Any act of love, however, - no matter how small - lessens anxiety's grip, gives us a taste of tomorrow, and eases the yoke of our fears. The reward of love is peace of mind, and peace of mind is the end of man's desiring.

そもそも “To kill a mockingbird” を通じて著者がいいたい事はこの表題の通り、よい声で歌を歌ってくれるだけで何の害もしない Mockingbird を殺してはいけない、と Atticus が子供たちに銃を贈った時に云った言葉によくあらわれている。

‘Your father’s right,’ she said. “Mockingbirds don’t do one thing but make music for us to enjoy. They don’t eat up people’s gardens, don’t

nest in corncribs, they don't do one thing but sing their hearts out for us. That's why it's sin to kill a mockingbird.' (p. 96)

He likened Tom's death to the senseless slaughter of songbirds by hunters and children and Maycomb thought he was trying to write an editorial poetical enough to be reprinted in the Montgomery Advertiser. (p. 245)

黒人であるという理由のみで無実のつみをきせられ死刑を宣告される Tom, それからこちこちのバプテスト教徒の父母によって一生室に閉じこめられている隣人 Boo Radley に対する同情, むづかしい黒人差別の感情にこり固まっている南部の人たちの中で殆どすべての人を敵にしてまで裁判で Tom の弁護をした Atticus は次の一節にあるように淡々として何も出来ない年令を経た大人しい人のような態度でありながら, くじけない勇気と静かな愛をつらぬき通したのである。

So far things were utterly dull : nobody had thundered, there were no arguments between opposing counsel. There was no drama ; a grave disappointment to all present, it seemed. Atticus was proceeding amiably, as if he were involved in a title dispute. With his infinit capacity for calming turbulent seas he could make a rape case as dry as a sermon. (p. 173.)

この父の偉大さを尊敬する事を覚えた Jem にはこの倫理観がしみこんで行くのである。

この父 Atticus に Tom の無実を証明されて怒った原告 Ewell におそわれた Jem と Scout を二人を愛するがために命がけで救おうとした Boo が, はからずも Ewell を殺してしまった時, 保安官がこの問題を正式に取上げまいと決心する。

その時, Scout が父 Atticus をなぐさめる言葉が次のようであるが, Atticus looked like he needed cheering up. I ran to him and hugged him and kissed him with all my might. “Yes sir, I understand,” I reassured him. “Mr. Tate was right.”

Atticus disengaged himself and looked at me. “What do you mean?”

“Well, it'd be sort of like shootin' a mockingbird, wouldn't it?”(p. 180.)

「Mockingbird を殺してはいけない」というのは愛と正義観の表現であり、作者の強い倫理観である。

以上の諸点については要素（条件）を十分に充たしているように思われるが、問題は下記の諸点であろう。

芸術性と情緒

筋の運び、人物の使い方、性格描写、テーマの運び方、申し分なく読者の心を捉えるが、論理的にすぎ、書きすぎている（後述）感がある。

日常そのままの意識で入って行ける点はいいが、情操と intellect の間をゆれ動く、という感じがない。裁判の場面が全体の5分の1をも占め、rape という題材を扱いながら、しかも論理的であり書き過ぎる欠点を持ちつつ、この作品が和らげられ、救われているのは、そのユーモアのある点と、子供の純粋な目を通して見られている形にまとめられているせいであろう。子供の目を通じて見る時、事象が新鮮に純粋にうつし出される事は“*When Children Discover America*”に彼女自身が説明している。

Wordsworth was right when he said that we are born with a divine sense of perception. As we grow older, the world closes in on us and we gradually lose the freshness of the view point that we had as children.

遊びの要素も少々不足しているように思われるのは筆が行き届き過ぎているせいであろうか、ともすれば実用的な感さえ抱かせるのは論理的であり、教育的な面が時々むき出しにあらわれている所にもあろう。

真理の追求 (1)

子供たちが正義観と、democracy を学んで行くという点で真理の追求と云えるかもしれないが、Atticus と Maudie と Jack の3人の中に、はじめからその2つの性格が set されていて、それを子供たちが次々と見出して行くという形になっているが、掘り下げる、或いは追求の迫力に欠けている点がある。

調和 (4のe)

従って調和も力弱い感じで、話の筋に対する interest の方がより強く思われる。

成長 (4のf)

子供たちが種々の経験によって成長し、学んで行くが、苦心して登山したあとの成

就感というようなものが幾分弱く、前述したように倫理観がはじめから設定されていて、実質的な内面的な脱皮が行われていない点、このような点に大衆的と評価される理由の一つがあるのではなからうか。

尚作者は Scout, Jem, Dill, Atticus, Maudie の中に自分の分身を描いているようであるが、自分に対する自信が強すぎると云うのか、例えば Ewell, Mayella, Alexandra, Stephanie などを典型的な悪人仕立にして、少々勸善懲悪的なところがある。作者は恐らく、自分の子供時代を思い浮べつつ、Scout を書いたと思われるが、筋の設定という点、やや stereotype 化した人物を外から繰っているという感じのあるのは通俗小説と云われるもう一つの所以であるように思われる。

最後に technique の問題であるが、この小説の最後に近い一部を引用する。

His fingers found the front-doorknob. He gently released my hand, opened the door, went inside, and shut the door behind him. I never saw him again.

Neighbors bring food with death and flowers with sickness and little things in between. Boo was our neighbor. He gave us two soap dolls, a broken watch and chain, a pair of good-luck pennies, and our lives. But neighbors give in return. We never put back into the tree what we took out of it : we had given him nothing and it made me sad.

I turned to go home. Street lights winked down the street all the way to town. I had never seen our neighborhood from this angle. There were Miss Maudie's, Miss Stephanie's - there was our house, I could see the porch swing - Miss Rachel's house was beyond us, plainly visible. I could even see Mrs. Dubose's.

I looked behind me. To the left of the brown door was a long shuttered window. I walked to it, stood in front of it, and turned around. In daylight, I thought, you could see to the post office corner.

Daylight... in my mind, the night faded...

Atticus was right. One time he said you never really know a man until you stand in his shoes and walk around in them. Just standing on

the Radley porch was enough.

The street lights were fuzzy from the fine rain that was falling.

(p. 282)

長い間一目でよいから会いたいと思っていた Boo に Scout は最初にして最後の出会いをする。そのいたいたい人を送って行った時の描写がこれである。

Boo の住んでいる部屋の窓 (a long shuttered window) の前に立って町を眺めた時、そのまちの様子はいつもの町と全く異って見えた。

「私はこの角度から町を眺めた事はなかった」 (I had never seen our neighbourhood from this angle) そこから眺めると、ここで春、夏、秋、冬に起った小さな事、大きな事が、この場所から見えたであろう姿で次々と目の前に浮んで来る。

(Boo はここから見ていたに違いない) この引用のところまででこの小説は終るべきであったように思われる。その後、家に帰って来たら、叔母さんはもう寝ていた、父が Jem の部屋で本をよんでいた。それは Jem の「灰色の幽霊」という本であった。(ここで作者は父が Jem の立場に立って見ようとしはじめた事を云いたかったのであろう。) 半分眠りながら、父に服を着替えさせてもらって、ベットに入るところまで書いたのでは読者の imagination の働かぬ余地がない。父が Jem の本をよんでいた所まで書きたいが故に、ここまで筆を引いて来たのであろうか、Scout が「灰色の幽霊」の筋を眠気で朦朧とした頭で父に説明する。

“An’ they chased him ‘n’ never could catch him ‘cause they didn’t know what he looked like, an’ Atticus, when they finally saw him, why he hadn’t done any of those things… Atticus, he was real nice…”

“he was real nice…” の中に Boo was real nice を含めているが、この言葉を云わせたいために、蛇足とも思われる 2 頁を書きのばしたのであろうか。その Scout の言葉に対して“Most people are, Scout” と父は返事をしている。間接的ではあるが、論理的、教訓的に過ぎる最後である。せつかくの詩と抒情のある作品も惜しい事である。他にもこの作者はたたみかけて書きすぎるところがあるのは惜しい事である。三島由紀夫の「仮面の告白」の最後は Scout と Boo の最後の場面と同様、多分二度と会はないであろう人との別れの場面であるが読者に imagination の

余地を残している。

Lee の文章は平明で古典などからの引用はない。(聖書の箇所が、2, 3 ある) この平明さは、大衆を意識しているのであろうか?、通俗文学は一般的に低いレベルに合わせるせいであろう。「本を読む事」は「遊ぶ事」「仕事をしない事」と同義語に解釈している人々がいる。このような人々の読書は週刊誌、婦人雑誌、せいぜい謂ゆる大衆本に限られているようである。

日本では第一次大戦後通俗(大衆)文学が出来て、大衆作家なるものも世間がきめているようであるが、その中の吉川英治氏は前述のように、大衆作家として通っているが、その vocabulary の豊富さと自分自身での新しい人間の創作はその作品『新平家物語』で一種の詩情を持ちつつ当時の大衆と風俗を中心とした新しい歴史小説を創作している。モームの「月と六ペンス」は中野好夫氏の評によれば驚くべき大衆性があるというのである。恐らく大衆を意識して幾分設定的なところがあるという意味であろう。

“To Kill a Mockingbird” は殆どの純文学の条件をそなえていながら、その書きすぎと論理的にすぎた抒情性が害されている事と幾分 stereotype 化している人物の個々についての掘下げが足りないために純文学になり切っていないように思われる。通俗文学と純文学との間に位置している、と思われる。

通俗文学の問題について、桑原氏は「もはや文学の世界の中だけでは処理が出来ず、ひろく社会の問題との関連に於て考察されねばならぬ」としているが、今後は心理学的、社会学的、歴史学的な問題を含んで来るであろう。一口にして云えば娯楽的影響の強いということも一つの通俗文学の要素であろうか。